

## 井上雅雄教授記念号に寄せて

井上雅雄先生は1991年4月、立教大学経済学部へ赴任され、20年間にわたり教授として教育及び研究にご尽力されました。先生の担当科目は「労働経済論」であり、その学殖に裏打ちされた講義は多くの学生に強い印象を与えるものでした。

井上先生が最初に取り組まれた専門領域は、中小企業における労務管理及び労使関係の実証研究です。そこでは、労働者の意思が多様なルートを通して経営に反映され、それが企業成長を可能とする従業員統合の機能を果たすことが解明されました。さらに、企業倒産に至る原因の産業論的分析をふまえて、労働者と労働組合による企業自主管理の事例が取り上げられ、その主体的・客観的条件、工場経営の実態、その運営原理、そこに孕まれた問題点及びその試みの日本労使関係上の意義が解明されています。この研究成果は、著作『日本の労働者自主管理』として刊行されました。

井上先生が第二に取り組まれた研究領域は、戦後日本の労働組合運動の主軸を担ってきた総評の解体と連合の成立という労働戦線統一運動の実態及びその社会的意味です。この研究では、運動に内在する論理の分析に加え、戦後日本社会における大衆消費社会の進展と成熟という視点から、この運動のもつ意味が歴史社会的に明らかにされました。さらに、春闘による定期的賃金上昇が労働者の生活様式と生活意識の変容を招いて労使対立的な組合運動の基盤を侵食していった現象が、イギリスの「豊かな労働者」論との対比において分析されました。この研究は、著作『社会変容と労働』としてまとめられています。

井上先生の第三の研究領域は、戦後直後期における映画企業・東宝の労働争議です。この研究では、映画という文化生産における経済的価値と芸術的価値との対立・相克が労働争議を介して拮抗する様相が、戦後直後期の時代背景のうちに精緻に分析されています。『文化と闘争』と題された著作では、争議を担った演出家・技術者たちの思考と行動のあり方を規定する諸契機・諸要因が細部にわたって掘り起こされ、それを貫く内的論理が明らかにされています。この作品は労働史研究とともに映画史研究に新たな一頁を加えたものと評価されています。

以上のように、井上先生の研究は多くの領域にまたがっており、労働という切り口から社会の秩序形成の様式とそこで人間行動の特性を、多様な研究対象によって実証的に解明したことに特徴があります。

本学において井上先生は「労働経済論」のみならず、数多くの授業に取り組みましたが、

本学全体の教育における最大の功績は、全学共通カリキュラム総合教育科目「仕事と人生」を創設されたことです。2000年、先生が開講された「仕事と人生」は、企画からカリキュラム編成・講師選定・講義運営に至るまで先生が担当され、先生は退職されるまで科目を担当されました。この科目は国内の大学として初めて試みられたキャリア教育科目として社会的注目を集め、多くの大学に影響を与えるモデル授業となりました。その授業は質的水準が高く、教養科目でありつつも高い専門性が保たれました。これは井上先生のご尽力によるところがきわめて大きいといえます。

本学部一同、井上先生が今後とも健康で過ごされ、研究をはじめとするさまざまな分野で活躍されることを願っております。

2012年1月

経済学部長 池上 岳彦